

【昭和17年9月25日受付】

皇漢眼科に於ける緑内障の見方と其の治療法 (内服薬)

千葉医科大学眼科科学教室 (主任 伊東教授)

醫學士 鈴木 宜 民

Suzuki-Yoshitami

〔内 容 抄 録〕

緑内障は今日の醫術を以てしても、最も治し難い眼疾の一つである事は誰れしも認むる處である。よって私は從來全然顧みられて居なかつた皇漢眼科書から、緑内障と思はれる眼疾を集め、夫等に就ての見方及び治療法殊に内服薬に就て考察した。

皇漢醫學は其の見方が形式的な病因論に支配されて居る爲め、今日其の總べてを明かに理解する事は困難であるが、要するに本症の本態を肝と腎の虚勞に歸し、其の誘因として過勞、悲憂、血行不利、

忿恚、強飲及び腎臓の食物等を擧げて居る。

其の内服薬としては、鎮痙解熱劑が最も屢々用ひられ、次いで強壯滋養劑、瀉下劑、驅瘀血劑等が用ひられて居り、今日の治療法と比較して見ても何等背行的でなく、當時は手術は無かつたのであるから、相當効果を擧げたものと思ふ。現今は手術や Iontophorese 等有るが、此の方面も大いに研究する餘地があると思ふ。

目 次

- | | |
|-------------------|-------------|
| 1. 緒 言 | 薬及び夫等に對する考按 |
| 2. 参考皇漢眼科書に就て | 5. 總括及び考按 |
| 3. 如何なる眼疾を緑内障としたか | 6. 結 語 |
| 4. 原書別緑内障の見方と其の内服 | 文 献 |

1. 緒 言

緑内障は今日最も治し難い眼疾の一つである事は誰しも認める處であるが、其の原因に就ても或は體質遺傳が喧しく叫ばれ、更に眼球構造の異狀、毛細管透過性の變化、或はホルモンの障碍等種々相當根據有る點が擧げられて居るが、未だ釋然たる處に到達せず、今後の研究に俟つ點が多々有る有様である。

然らば一体皇漢眼科に於ては此の緑内障の症狀を如何に見、又其の原因を如何に考へて居たか、古き過去を仔細に尋ねて見る事は現在をより正確に理解する上に缺く可からざる事である。支那醫學は西歐醫學とは反對に病理、解剖等の科學的方面よりも治療方法が特に進歩した點に特色があると思はれる。此處に私が緑内障の内服薬に重點を置いて本文を述べんとする次第である。

由來、宋以後の支那醫學では疾病の本體、病理に關しては陰陽五行説の如き形式が盛んに信ぜられて來た。例へば眼科では瞳孔は腎の司る處として、其の異常は即ち腎の病なりと直觀的に斷定して居る。又眼科全書⁽¹⁾に目の精は肝に在り、肝に異常無ければ目も亦健全なりと云つて居る。

要之、緑内障の原因は後述にも有る如く總て之を腎と肝の病に歸して居ると云つてよい。次に漢方に云ふ腎は必ずしも今日の腎臓でない事を知つて置く必要が有る。皇漢醫書を読むに當つては尠く共以上の如き支那醫學の特長を大体掴むで居ないと理解が出来ない。それが非科學的であるいは別として、其の見方、考へ方は大体知つて置く必要が有ると思ふ。

2. 参考皇漢眼科書に就て

當教室には伊東教授が苦心蒐集された皇漢眼科書が大小百有余冊有る。然し夫等の中には處方集丈け、或ひは一部分の寫本と云ふ様に其の總べてが内容の完備したものではないが、中には千金方、銀海精微、眼科全書、審視瑤函等の支那眼科書から、本邦に於ける馬島流、八幡流或ひは眼科錦囊等何れも代表的眼科書が含まれて居り、皇漢眼科書の全部を網羅したわけではないが、是に依つて吾々祖先が行つて來た治療法の跡を窺ひ知る事が出来ると思ふ。

3. 如何なる疾患を緑内障としたか

茲に皇漢醫書に於ける緑内障と云つても如何なる眼疾を云ふか、之は嚴密に云へば中々困難な問題で、殊に皇漢眼科書の記載は系統的でない爲め、果して今日吾々の見て居る緑内障と總べてが一致するか否か、其の正鵠は期し難いが、私は出来る丈其の範圍を制限して、今日緑内障の最も顯著な特長とされて居る視力低下、眼痛、偏頭痛、惡心、嘔吐或ひは、瞳孔の散大緑變等の記載の揃つた者を出来る丈け集めた。

4. 原書別緑内障の見方と其の内服薬及び夫等に對する考按

以下順次漢方に於ける緑内障に就て述べる。内服薬の項では薬の成分及び其の作用は中々複雑で、勿論夫等の中には今日明瞭にされて居る者も有るが、未だ不明の者も多い。従つて個々の漢薬の作用は到底一言を以て表はせるものではない。依つて茲では唯其の代表的と思はれる作用と、如何なる目的に使用されたかに就て説明して煩鎖冗長を避けた。又各皇漢薬の分量は後述の如き理由に依り輕卒に g 量に換算出来ない故原書通りに記した。

1. 銀海精微⁽²⁾の説

坐起生花症 此症肝血衰。胆腎二經虛也。六陽不舉。故久坐傷血。起則頭暈眼花。或眼前常見花發數般。或赤或黑或白（中略）良久乃定瞳人開大不清。此症宜補肝腎（中略）恐久變爲

青盲内障云々

補腎丸：磁石^{火煨醋碎七次水飛過三兩} 肉苁蓉^{酒浸焙} 五味子 熟地黃^{酒蒸焙} 枸杞子 兔絲子^{淘淨酒浸另研各二兩}

楮實子 覆盆子^{酒浸} 車前子^同 石斛^{去根各一兩} 沉香^{另研五錢} 黃柏^{各一兩} 青鹽^{另研五錢} 或加知母

明目固本丸：治心熱腎水不足用少晴光久服生精清心

生地黃 熟地黃 天門冬 麥門冬 枸杞子 乾菊花

右各研末煉蜜丸爲梧桐子大每服三十丸空心塩湯下

考按 本症は其の記載から網膜の血行障礙を指したものであるが、中に青盲内障の語も有り、或は緑内障の前驅症も加へて居たかも知れぬ、依つて茲に引用した。

其の原因を肝血衰へ胆腎二經の虛に歸して居り、治療の項では肝腎を補す可しと云つて居るが、其の原因説と同様形式的な支那醫學に由來するものと思はれる。

補腎丸では、磁石、肉苁蓉、五味子、熟地黃、枸杞子、兔絲子、楮實子等は何れも強壯藥、沉香は鎮靜劑、黃柏は健胃劑で、要するに強壯強精を目的としたものと思はれる。

明目固本丸では、菊花が頭痛風邪藥で、他は何れも強壯劑で、前者と同じ目的に使用したものであらう。

肝風目暗疼痛症 乃是肝腎虛勞。不時疼痛。舉發無時。痛則惟眼珠墜疼。頗有赤澁淚出。(中略)眼前多見花發數般。或黃或白或黑。(中略)此症實有內外相兼病也。非徒治外。而不治內曷濟哉(中略)更加忌口五辛。諸熱物莫吃。

補腎活血散：藁本 白芷 石決明 天麻 防風 細辛 羌活 黃蘗 菊花 當歸 生地黃 黃連 右等分水煎服

補腎丸：澤瀉 細辛^{去苗} 兔絲子^{酒浸焙乾} 五味子^{炒各一兩} 茺蔚子^{焙二兩} 山藥^{一兩五錢} 熟地黃^{焙二兩}

右爲末煉蜜爲丸如梧子大每服二十丸空心塩湯下

白蒺藜散：蒺藜 菊花 蔓荊子 草決明 甘草 連翹 青箱子

右等分水煎食後溫服

考按 本症は其の記述から今日謂ふ慢性炎症性緑内障に當るものと思はれる。然し瞳孔の變化に就ては觸れて居ない。其の原因に就ては前症と何等變る處がない。

次に本症が内外二相、即ち外眼部と身体内部の疾患なりと云つて、其の治療に注意して居る點は、實に漢方醫學の特色を物語つて居る。又食物に對する注意も注目に値する。

扱て、内服藥に就て見るに、補肝活血散は藁本、白芷、防風、細辛、羌活、天麻及び菊花等の鎮痛解熱作用を目的としたものであらう。

補腎丸は澤瀉、茺蔚子は利尿の目的に、細辛は頭痛に、兔絲子、五味子、山藥及び熟地黃は強壯滋養劑として使はれたものと思はれる。即ち其の名の示す如く、補腎即ち強精及び利尿が目的であらう。

白蒺藜散の蒺藜、蔓荊子、青相子等は強壯薬であり、連翹は淨血利尿薬、甘草は矯味緩下劑である。即ち本劑は強壯を主と爲し、兼ねて利尿及び下劑を配したものと解される。

本書の卷末には緑内障に用ひたと思はれる次の如き處方が有る。

熟地黄丸：治血弱陰虛……偏頭腫悶。腫子散大。視物則光。理當養血涼血益血除風散火則愈矣

熟地黄^{一兩} 五味子 枳殼^炒 甘草^{炙各三錢}

右爲細末。煉蜜和丸。每服一百丸 食後清茶送下日進三服。忌食辛辣物云々

此處に、血弱く陰虛とあるが如何なる意味か明かでない。然し後で「養血涼血益血云々」と云って居る處を見ると、何か血液の質的、量的變化を其の原因として強調したものではあるまいか。其の内容は滋養強壯薬が主である。

磁石丸：治雷頭風變内障

磁石^{煉紅醋浸三次} 五味子^炒 乾姜 牡丹皮 玄參^{各一兩} 附子^{炮五錢}

右爲末蜜和爲丸每服十丸食後清茶或塩湯下

雷頭風變内障に就ては説明は無いが、後述の眼科全書⁽²⁾等の記載に従って本症に入れた。其の内容は磁石は強壯鎮痙薬として、又附子も鎮痙薬として用ひられたものと思はれる。

2. 眼科全書⁽¹⁾の說

青風内障 青風内障者無乃五風變五色不離頭痛而起亦因酒色過度內傷腎氣不痒不痛漸失其明……瞳仁開大漸々變青色……若神氣散盡不見三光更無治法云々

羚羊角湯：羚羊角 人參^{各一錢} 地骨皮 車前子^{隔紙炒} 羌活^{各五錢}

右研細末每服二錢水煎食後服

歸杞湯：當歸 枸杞子 楮實子 覆盆子 石斛草 蜜蒙花 熟地黄 黃連 防風 玄參 連翹 白芍 陳皮

右白水煎食後服

十一味還精丸：川芎 白朮 防風 木賊 羌活 甘草 蒺藜 蜜蒙花 青相子 兔絲子 當歸

右研細末米糊爲丸如梧子大每服四十丸日三次茶送下

考按 漢方に於ける疾病の理論が形式的である事は前述の如くである。本症に於ける五風、五色等の説も亦同様で到底其の儘理解出来ない。原因としては酒色過度を擧げて居る。「不離頭痛」或は「不痛不痒漸々失其明」等の記載は恐らく今日謂ふ單性緑内障に該當するものと思はれる。

羚羊角湯では羚羊角、地骨皮、羌活、龍胆草は頭痛風邪薬、人參、當歸は補血強壯劑で、要するに解熱鎮痛が主で、それに強壯薬を配し、更に利尿薬として車前子を加へたものと解さ

れる。

歸杞湯の内容は何れも強壯滋養劑である。十一味還精丸では強壯が目的で、併せて鎮痛解熱劑を配し、更に健胃利尿藥である白朮を加へたものであらう。

綠風內障 綠風者乃五風變化之症因肝氣熱極虛勞所致亦且腎水不滋肝氣目損日久則變爲昏初時但覺頭額鼻頰諸處疼極夜見有花……先患一眼後乃相牽俱患……瞳仁變綠不見三光終無治法……婦人多患此症何也心主血肝納血婦人以血爲主云々

羚羊角散：羚羊角 防風 川芎 羌活 菊花 半夏

右研爲末每服二錢荊芥湯調下

羚羊角飲：羚羊角 防風 人參 知母 白朮 玄參 桔梗各五錢 細辛 車前子 黃芩各一錢 枸杞子 熟地

右細爲末每服五錢水煎服

還精丸：兔絲子酒煮 川芎 木賊 蒺藜炒去刺 白芍 熟地 甘草 羌活 青柏子 蜜蒙花 當歸 枸杞 肉蓯蓉 右研細末煉蜜爲丸梧子大每服三十丸食後白湯下

考按 此處では原因を肝臓の虚勞に歸して居る。「腎水不滋肝氣」とは今日謂ふホルモン説に相當するものではなからうか。其の症狀は正しく今日の炎性綠内障に符合する處である。又本症が婦人に多い點を既に注目して、其の原因を訊ねて居る事は驚く可き事實で、其れに對する解答は、依然觀念論的範圍を出て居ないが、其の見方は中々鋭い。

次に、内服藥を考へて見るに、羚羊角散では羚羊角、防風、菊花等の頭痛、風熱藥を主眼としたものであらう。

羚羊角散では頭痛解熱劑が主で、更に強壯、利尿劑も加へて居る。桔梗（祛痰藥）を用ひて居る所以は、矢々に依り体内の有毒物の排泄を企圖したものと考へられる。

還精丸は前述の十一味還精丸と大差無い。

雷頭風內障 雷頭風者……初頭痛如雷痛難忍或吐或惡心故曰雷頭風久而毒氣入目當此之際如若致失明不見三光瞳仁漸大如黃蠅色日夜如一般同素無法治男子少得婦人多受此症云々

瀉肝散：知母 黃芩 桔梗 大黃 朴硝 烏頭

右研每服四錢白水煎食後服

蘄艾湯：蘄艾 薄荷各二十錢 細辛五錢 南星 金蝎各一錢五分 麝香一分起碗 右白水食後服

石羔散：石焦五錢 麻黃一兩 乾姜七錢五分 何首烏五錢 右研爲末每服二錢白水煎食後服

考按 初發時の症狀としての猛烈な頭痛、惡心、嘔吐等先づ急性炎性綠内障の發作を思はせるに十分である。其の激烈なる痛みを雷の如しとは正に至言である。本症に於ても婦人に多い事を擧げて居る。

内服藥の瀉肝散では知母、黃芩は風邪解熱藥、桔梗は祛痰藥、大黃、朴硝は下劑で、要す

るに其の名の示す如く瀉下作用が目的であらう。

蕪艾湯で蕪艾は解熱止吐薬、其他は何れも風邪鎮痛薬である。

石羔散では石羔は即ち石膏で清涼解熱薬、麻黄も風邪の薬、即ち本症が風熱に因ると云ふ原因説に立脚したものであらう。

猶、本書にも起坐主華外障、及び肝風目暗外障が有るが銀海精微と大差無い故其の説明は省く。

3. 眼科龍木論⁽⁶⁾の説

青風内障 此眼初患之時。微有痛澁。頭施腦痛。或眼先見有花無花。瞳人不開不大。漸々昏暗。……恐久結爲内障……皆因五臟虛勞所作云々

羚羊角湯：羚羊角 人參 黑參 地骨皮 羌活各一兩 車前子一兩半

右爲末以水一盞散一錢煎至五分食遠服

還睛散：人參 車前子 地骨 茯苓 細辛 防風 芎藭 羌活各等分

右爲末以水一盞散一錢煎至五分食後去渣溫服

考按 本記述に於ては瞳孔に關する症狀が不十分であるが、病名其他の記載から推して、先づ綠内障として誤り有るまいと思ふ。

内服薬の羚羊角湯、還睛散に付いては既に眼科全書の項で述べた處と略々同様である。

綠風内障 此眼初患之時。頭旋額角偏頭。連眼瞼骨及鼻頰骨痛。眼内痛澁見花。或因嘔吐惡心。……便令一眼先患。然後相牽俱損。……爲肝肺受勞。

羚羊角子飲：羚羊角 防風 知母 人參 茯苓 黑參 桔梗各二兩 細辛三兩 黃芩 車前子各一兩

右爲末以水一盞散一錢煎至五分食後去渣溫服

還睛丸：芎藭子 防風各二兩 人參 決明子 車前子 芎藭 細辛各一兩

右爲末煉蜜爲丸如桐子大空心茶下十丸

考按 初發時に於ける症狀は正に今日の急性炎性綠内障を思はせるに十分である。内服薬の中羚羊角飲子は前述の羚羊角湯又は羚羊角散と大差ない。還睛丸に就ても既に述べた。

雷頭風内障 此眼初患時。頭面多受冷熱。毒氣冲上頭旋。大如熱病相似。俗雷頭風。或惡心或嘔吐。年多冲入眼内。致令失明。……瞳人大或小不定。後乃相損云々

瀉肝湯：防風 芎藭子^{各二兩} 五味子 細辛 黃芩 大黃 芒硝^{各二兩} 車前子^{一兩半} 桔梗一兩

右爲末以水一盞散一錢煎至五分食後去渣溫服

磁石丸：銀海精微の項參照

考按 本例に於ては猛烈な頭痛を大の熱病に譬へて居る。其の激しい症狀は矢張り、今日の急性炎性綠内障に入る可きものと思ふ。其の内服薬である瀉肝湯は眼科全書の項で述べた處

と大差なく、要するに瀉下排泄が目的である。磁石丸は既述の如く鎮痛強壯が目的で、それに有毒分解産物を排出させる目的で驅瘀血藥牡丹皮を加へたものと思ふ。

4. 審 視 瑤 函⁽⁹⁾ の 説

青風内障 青風内障肝胆病。精液虧分氣不平。……視瞳神内有氣色昏朦。如青山籠淡烟也。……比平時光華。則昏朦日進。……色變綠色則症甚而光沒。陰虛血少之人。及竭勞心思。憂鬱忿恚。用意太過者。每有此患云々

羚羊角湯：人參 車前子 元參 地骨皮 羌活 羚羊角^{挫末各等分}

右白水二鍾煎八分去滓食後服

考 按 其の原因或は本体に關する見方は上述の銀海精微、眼科全書等の説く處と何等異なる處がない。然し、陰虛血少、或は憂鬱忿恚等無意味な説とは思はれない。其の瞳孔の色の觀察も興味有る處である。

羚羊角湯に就ては眼科龍木論の項で述べた如く鎮痛解熱作用が主であらう。

綠風内障 綠風内障其色綠。瞳神若大害尤速。……其色如黃雲之籠翠岫。似藍靛之合藤黃。乃青風最重之症。……雖曰頭風所致。亦因痰濕所攻。火鬱憂思忿怒之故。……蓋久鬱則熱勝。熱勝則肝之風邪也。故瞳神愈々散。大凡病到綠風。十有九不能治也。

半夏羚羊角散：羚羊角^{挫細末} 薄荷 羌活 半夏^{灸各錢半} 白菊花 川烏^炮 川芎 防風 車前子^{各五錢} 細辛^{二錢}

右爲末每服三錢生姜三片水二鍾煎一鍾去滓服或荊芥湯送下

羚羊角散：羚羊角^{挫末} 防風 知母 人參 黑玄參 茯苓 黃芩 桔梗 車前子各四兩 細辛二兩

右爲粗末每服三錢白水煎食後溫服

考 按 本症が青色内障の進んだものである事は此處に明かである。其の原因に頭風、或は痰濕を擧げて居るが、夫等が今日の如何なる疾患に該當するかは遽かに斷定出来ないが、漢方に於ける見方として、一應知って置く可き處であらう。

久しく鬱なれば肝の風邪と成ると云ふが、肝の風とは銀海指南⁽⁷⁾に「血虛の事なり」とある、即ち、今日謂ふ精神作用の血管系又は血液に及ぼす作用に相當する説と思はれる。

其の内服藥である半夏羚羊角散は、鎮痛解熱劑である羚羊角散に鎮嘔藥である半夏を加へたもので、羚羊角散に就ては既に述べた。

5. 馬 島 流 の 説

馬島流は本邦最古の眼科専門（其の興りは、後村上天皇の御代正平12年、皇紀2017）と云はれて居るが⁽⁴⁾ ⁽¹¹⁾、乍遺憾綠内障と思はれる眼疾の記録は殆ど見當らず、到底支那眼科書の比でない。即ち馬島流眼科禁方書⁽⁸⁾に「青ソコヒハ瞳子ノ内青ナリ若年ハ十ニ三ツニツ治ス

可シ虚仁老人ハ治スル事ナシ滋腎湯兎絲子丸八味丸」とあるのみである。

猶、富士川博士は日本醫學史⁽⁴⁾ 166 頁に「石内障は眼球の緊張増加して石の如く成るによりて名づけしものならむ(緑内障)」と云って居るが、其の詳細は明かでない。

6. 山田流の説

眼科提要⁽¹³⁾に次の如くある。

「青そこひと稱する者の中に雷頭風より来る者一種有り。青そこひに成りてからは同一症なり。薰劑を用ひ、内服に當歸地黄湯を用ふ。十に五、六は治す可し」。

當歸地黄湯：當歸 地黄 黄芩 黄連 枇杷葉 車前子 五味子各等分 甘草 八味水煎

考按 山田流は漢蘭折衷の魁を爲した眼科であるが、茲では未だそれと思はれる點は無い。其の内服薬は補血強壯劑と思はれる。

7. 八幡流の説

「人見大にして青きは食傷内障」として眼病極秘書⁽¹⁴⁾に次の如き内服薬を擧げておる。

飯 生芋 桔 木 紫 煎服

思ふに之は、食事不攝生に因って起る事を指したものであらう。飯は當歸、生芋は生地黃、桔は桔梗で補血強壯を目的とした内服薬であらう。

8. 三井流の説

三井元孺眼科發微⁽⁹⁾に次の如くある。

「青風内障腫子淺黃色に成るなり。雷頭風は最初に本科醫より心得て居て頭痛の時に瀉肝散の輩の薬にて熱毒を下して早く勢を折らざれば竟には腫子散大して脉息も絶へ神水凝結して黄色になりスデバツタ様に見えるに至る此時に眼科に治を乞ふも早治法無きなり」。

即ち、初發時に内科醫を訪れて適當な眼科的治療を忘れて居ると危険なりと注意して居る點は、確に炯眼である。

此外、三井氏眼科方函⁽¹⁰⁾に羚羊角散、羚羊角湯、半夏羚羊角散等の處方を擧げて居るが、何れも前述支那醫書の夫と大差無い故、其説明は略する。

9. 銀海波抄⁽¹²⁾の説

青盲内障 此症初發少頭痛或不頭痛而作瞳孔開大形狀與雷頭風同而漸々瞳孔變青色……是血虛兼濕毒而發此症矣故婦人其初見經行不順……宜順血肝開鬱寧神也瞳孔至白色者不治矣

。 羚羊角湯：羚羊 人參 玄參 地骨 羌活各一兩 水煎溫服

抵當湯：治前症而瘀血小腹痛或經行不順或如狂發癇者

水蛭 蟅蟲三十枚 桃仁二十ヶ 大黃三兩 水煎服

考按 本書では其の原因として、血虛の外に濕毒を擧げて居る。恐らく前者は今日謂ふ血管血液系統に屬する説であり、後者は何か外因性の原因を指したものであらう。

内服薬である羚羊角湯は既に再三述べた如く鎮痙解熱劑であり、抵當湯は驅瘀血劑である。(瘀血とは一口に云へば有毒老廢物を含んだ血液を指す)。即ち、木蛭、虻虫、桃仁の驅瘀血作用と、大黃の瀉下作用により、体内の有害物の驅逐を目的とした事がわかる。

雷頭風内障 此症初發大頭痛偏頭痛……不安寢食胸中煩悶吐黃水則兩瞳孔作散大而失明偏頭痛者偏眼作散大兩頭痛者兩眼作散大也……是濕毒爲風熱云々

熟芩丸：熟芩一兩 柴胡四錢 生芩一兩 當歸 黃芩各半兩 天門煇 五味 地骨 黃連各三錢 人參 枳實 甘草各五錢

右煉蜜爲丸每服五十丸空心白湯送下

瀉肝散：治前方症而大便秘結者

知母 黃芩 桔梗 大黃 芒硝 烏頭

右細末白湯或酒服

磁石丸：(眼科龍木論の項參照)

濟陰地黃丸：五味 麥門 當歸 熟芩 山藥 枸杞 甘菊 山茱 巴戟肉 肉蓯蓉各等分
右爲末煉蜜丸梧子大每服柴捌十丸食遠白湯送下

千金磁珠丸：治神水寬大空中有黑花云々

磁石^{吸針物}二兩 辰砂一兩 神麴四兩

先以磁石置巨火中煨醋碎七次晒乾別極細二兩辰砂別研細一兩生神麴共丸梧子大每服二十丸空心白湯送下

考按 本症が急性緑内障の激烈な發作である事は容易に理解する事が出来る。其の内服薬である熟芩丸及び濟陰地黃丸は其の内容の殆ど總べてが滋養強壯薬である。瀉肝散及び磁石丸に就ては既述の通りである。磁珠丸は磁石、辰砂の強壯作用を目的としたものであらう。

10. 眼科錦囊⁽⁸⁾の説

青盲 所謂青盲者其初起全無疼痛空中見花……久々瞳孔散大而帶青色竟盲廢至不可救焉此症關係劇頭痛或驚動悲憂或血行不利或強飲多房之人當其初起……猶可以救其什之一二矣云々

沈香天麻湯：羌活 天麻 防風 半夏 獨活各大 附子 益智 川烏頭各中 當歸 姜蠶 甘草各小 沈香中 十二味加生薑水煎

固本丸：磁石^{浸醋燒者}十錢 知母五錢 黃藥三錢 牛黃一錢 沈香二錢

右五味爲丸白湯送下二七服盡

磁朱丸：(銀海波抄の項參照)

浮石丸：海浮石 龍骨 牡蠣 硝石各二錢 蕎麥 大黃各三錢

右六味糊丸每服一錢白湯送下

蛭蛄散：蛭蛄散 煇硝各二錢 銀朱一分五厘

右三味爲末毎服一錢白湯送下

考按 其の原因として、頭痛、悲憂等を擧げて居るが、要するに今日の精神作用、或はホルモン説等に當るもので、既述の支那眼科書の説と著しい逕庭は無い。

猶、本庄氏は本書で、青盲とは和蘭語の「^{ブラーウオグ}勃刺阿烏惡々古」即ち「天藍色眼目」から是く云ふのであって、緑眼と譯したのは誤謬なりと云ひ、更に瞳孔は綠色に變ずる事はない故に、漢人の云ふ緑風障も青盲と云ふ可きだと強調して居り、漢蘭折衷派である本書の面目が躍如として居る。

次に内服薬では、沈香天麻湯の天麻は鎮痙薬、半夏は鎮嘔薬、益智は健胃薬で要するに鎮靜或は鎮痙が目的と思はれる。

固本丸では磁石は強壯薬、知母は解熱薬、黄蘗は健胃薬、牛黄は解熱解毒薬、沈香は鎮靜薬、即ち、強壯、解毒、解熱を狙ったものであらう。

磁朱丸に就ては既に述べた。

浮石丸は、海浮石、龍骨、牡蛎共にカルシウムを含む強壯薬であり、之に瀉泄薬である硝石と大黃を配したるものと思ふ。

螞蛄散も同様利水作用が主目的であらう。

5. 總括並に考按

以上原書或は流派別に述べて來た處を見るに、銀海精微の肝風目暗疼痛症、坐起生花症、或は眼科全書以下の青風内障と云ひ、緑風内障と云ひ、何れも今日の緑内障の範疇に屬す可きもので、唯夫等が示す症状に因り是く種々なる名稱を附したものであらう事は、證に依って治療を異にする漢方醫學から觀れば當然な考へ方であらう。

即ち、坐起生花症の如きは今日の分類で申せば緑内障の前驅期に屬するもので、青風内障は單性緑内障であり、緑風内障は炎性緑内障に該當す可きものであらう。而して、雷頭風内障は炎性緑内障の中で最も激烈な發作を示すものである事は、眼科全書、龍木論、銀海波抄等に明かである。

次に本症の本態に關しては、銀海精微では肝風或は肝腎の虚勞と云ひ、眼科全書では肝風の腦に上ったものと爲し、審視瑤函では肝胆の病に歸し、又頭風痰火とも云ひ、銀海波抄では濕毒に歸して居るが、此の風或は虚勞なるものが今日の如何なる病狀に相當するかは一言を以て云ひ現はせないとしても、要するに肝と腎の機能低下等を指して居る事は、明かに想像する事が出来る。

併して、是等肝の風或は肝腎虚勞の原因として銀海精微、眼科全書、審視瑤函或は眼科錦囊では酒色過度、悲憂、忿恚或ひは刺戟性食物を擧げて居り、眼科錦囊では更に、頭痛、血行

不利を擧げて居る。

以上の如き諸原因も、畢竟形式的な見方から生れたものであらうが、夫れを一から十迄悉く無意味な者として葬り去る可き理由は無いのであって、其の中から吾々は何等かの眞理を見出す必要が有ると思ふ。又見出さんとするのが本論文の主旨でもある。

例へば、今日に於ても、緑内障患者の既往症に、生來心配性であるとか、家事で苦勞したとか、或は又刺激性食品を好むとか屢々聴く處であつて、皇漢醫學が相當経験を基にして居る事も考へられる。

是くの如く考へて行けば、血虚、或は血少等の説は今日の原因説と比較して見ても、中々鋭い見方であつて、眼科錦囊の血行不利説は、此の意味に於て大いに評價す可き説であると思ふ。

更に眼科全書及び銀海波抄に本症が婦人に多い點を述べて居るが、是等も注目す可き處であらう。

次に内服薬に就て少しく統計的に述べて見るに、以上擧げた處方 43 方中、原書又は流派により全然内容を異にした處方を用ひて居る者も勿論有るが、中には全然同じ者を用ひて居るのが相當有るのに氣付く。以て當時の本症治療法の一端を窺ふ事が出来ると思ふ。

然らば如何なる處方が最も屢々使用されたか、各處方を其の主薬の性質に従つて分類して見た(第1表参照)。勿論之は極く大略の分類で、是等の間には其の内容の示す如く互に相近似した點も多々有る。

第 1 表 主薬による内服薬方の分類

鎮痙解熱劑	19	石 羔 散	1	明目固本丸	1	其 の 他	1
羚羊角湯	5	沈香天麻湯	1	補肝活血散	1	瀉 下 劑	6
羚羊角散	3	固 本 丸	1	白 蒺 藜 散	1	瀉 肝 散	3
磁 石 丸	3	强 壯 劑	17	歸 杞 湯	1	瀉 肝 湯	1
半夏羚羊角散	2	補 腎 丸	2	十一味還精丸	1	浮 石 丸	1
羚羊角飲	1	熟 地 黃 丸	2	還 精 散	1	螭 蛭 散	1
羚羊角子飲	1	還 精 丸	2	濟陰地黃丸	1	驅 瘀 血 劑	1
斷 艾 湯	1	千 金 磁 珠 丸	2	當 歸 地 黃 湯	1	抵 當 湯	1

鎮痙解熱薬が是く多く用ひられた點は、本症が呈する猛烈な頭痛眼痛、或は悪心、嘔吐等に対する對症薬と思はれるが、此の對症薬が單に對症作用丈けに止まらず、更に本症の本態に向つても何等かの作用を及ぼしたであらう事は、夫等漢薬の醫治作用を考へれば、容易に考へ得る處である。

次に強壯薬が屢々用ひられて居る事は、本症の原因を肝腎の虚勞、乃至五臓の虚に歸して居る事、更に本症が老年に多い點から、是等に對する目的に使用されたものと解される。今日

の言葉で云へば、栄養強壯療法、そう云ふものであると思はれる。

瀉下劑、驅瘀血劑も要するに全身療法の一つで、体内に蓄積された有害物質を瀉泄せんとしたもので、漢方の見方が如何に全体的であるかを窺ふ事が出来る。而して三井流では、此の瀉下劑を本症の早期に使用す可き事を強調して居る點は刮目に値する。更に、瀉下劑と云つても到底今日の單一の藥物の示す作用と、同じとは思はれない。其の中には必ず他の藥物も配合されて居り、茲にも漢方の特色が表はれて居る。

併し、以上挙げた薬が何れも克く効果を奏したとは考へられない。事實、審視瑤函では緑風に進めば十に九は不治と云ひ、馬島流では若年ならば十に三つ二つは治す、精力衰へた老人は不治と謂ひ、眼科提要には十に五、六は治すと、更に眼科錦囊には十に一、二は救ふ可しとあり、本症が如何に難物であったかがわかる。然し當時は今日の如く手術とか、イオントフォレーゼ (Iontophorese) 等は無かったのであるから、是等内服薬が本症の初期に有する價值は相當高く買ふ可きであると思ふ。

最後に、上述の内服薬 43 方中如何なる漢薬が能く用ひられて居るかを表に示した(第 2 表参照)。

第 2 表 内服薬 43 方中に用ひられたる漢薬の割合

車 前 子	15	磁 石	7	楮 實 子	2	澤 瀉	1	決 明 子	1
地 黄	14	大 黄	6	覆 盆 子	2	蔓 荆 子	1	枇 杷	1
防 風	14	枸 杞	6	天 門 冬	2	草 决 明	1	紫 蘇	1
羌 活	13	茯 苓	5	麥 門 冬	2	枳 殼	1	水 蛭	1
玄 参	12	半 夏	4	天 麻	2	枳 實	1	蛇 虫	1
鈴 羊 角	12	朴 硝	4	山 藥	2	蕎 麥	1	桃 仁	1
人 参	12	乾 姜	4	連 翹	2	龍 胆 草	1	柴 胡	1
細 辛	12	兔 絲 子	4	硝 石	2	陳 皮	1	山 茱 萸	1
附 子	10	肉 蓯 蓉	3	白 芍	2	白 朮	1	巴 戟 肉	1
黄 芩	10	沈 香	3	辰 砂	2	斷 艾	1	獨 活	1
五 味 子	10	黄 連	3	神 麴	2	南 星	1	益 智	1
當 歸	10	荒 蔚	3	石 斛	2	金 匱 蠅	1	姜 黃	1
知 母	9	蒺 藜	3	青 蘘 朮	1	海 浮 石	1	牛 牡 蠣	1
桔 梗	9	青 相 子	3	白 芷	1	龍 骨	1	牡 蠣	1
川 芎	7	牡 丹 皮	3	石 決 明	1	麝 香	1	銀 黃	1
地 骨 皮	7	密 蒙 花	3	石 斛 散	1	石 黃 黃	1		
菊 花	7	木 賊	3	螞 蛄 黃	1	麻 何 首 烏	1		
甘 草	7	薄 荷	3						

最も多いのは、利尿薬車前子である。地黄は強壯薬、其他鎮痙解熱風邪薬の多いのに氣付く。要するに夫等の作用は到底一言にて云ひ現せない、宛も白米と玄米との差の如くに。此の點も十分考慮に入れる必要が有ると思ふ。薬の分量に就ては、前述の處方の内容を見ても明か

な如く、内容は同じであり乍ら、分量の單位を異にして居る者が有り、流派に依り、或は又時代に依り變化して居ると思はれる點が多々有り、輕卒に今日の分量に換算は出来ない。之に關しては稿を改めて述べ度いと思ふ。

6. 結 語

以上私は支那眼科書を主として、皇漢眼科書に於ける綠内障と思はるゝ疾患に就ての見方と内服藥に就て解説した。

皇漢醫學の説は形式的な病因論に支配されておる爲め、今日の科學を以てしては理解出来ない點が多々有るが、夫等の中には相當眞理を穿った點も有り、或る點では西洋醫術の及ばぬ點も有る。殊に其の見方が全体的である點に獨得な意味が有ると思ふ。吾々は漢方から其の見方と、考へ方を學ぶ可きではないかと思ふ。

最後に、茲に擧げた内服藥の眞價は今後の臨床的實驗に俟たねばならない。

稿を終るに臨み、御指導並に御校閱を賜はりたる恩師伊東教授に衷心感謝す。

主 要 文 献

- 1) 袁學淵: 眼科全書 (明代).
- 2) 傅仁宇: 審視瑤函 (2304刊).
- 3) 本庄普一: 眼科錦囊 (2483, 文政6年刊).
- 4) 富士川游: 日本醫學史 (2601, 昭和16年).
- 5) 眼科竜木論 (2235刊, 萬曆乙亥).
- 6) 銀海精微 (明代).
- 7) 顧養吾: 銀海指南, (2587, 民國16年刊).
- 8) 馬島流眼科禁方書 (2482, 文政5年寫本).
- 9) 三井元孺: 眼科發微 (江戸末期寫本).
- 10) 三井元孺: 眼科方函 (2498, 天保9年寫本).
- 11) 小川劔三郎: 日本眼科小史 (2564, 明治37年).
- 12) 時岡玄岱: 銀海波抄 (2488, 文政11年寫本).
- 13) 山田大円: 眼科提要 (2477, 文化14年寫本).
- 14) 八幡流眼病極秘書 (2510, 嘉永3年寫本).